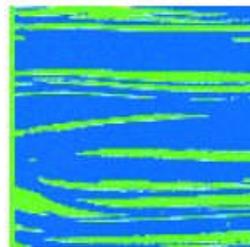


日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ



2011年 春号 No.62 (2011年5月25日発行)

発行 日本行動分析学会 理事長 藤 健一
〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内
FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>
E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

災害と学会	理事長・藤 健一
東日本大震災に遭遇して	鶴巻 正子
東日本大震災に関連して	宮崎 眞
連載 : いま, こんな社会貢献しています (1) JDD日本発達障害者ネットワークによる東日本大震災 現地支援ニーズ調査	井上 雅彦
連載 : いま, こんな研究会しています (4) 行動リハビリテーション研究会	鈴木 誠
連載 : いま, こんな授業しています (1) 自閉症スペクトラム障害臨床実習・専門実習	野呂 文行
「卒論・修論データベース」登録のお願い	研究教育推進委員会
事務局から : 特別会員制度が始まりました	事務局
事務局から : 会費の口座振替制度が始まります	事務局
事務局から : 会員名簿を改訂します	事務局
2011 年度「日本在住学生会員の ABAI/SQAB 参加に対する助成事業」助成者の決定	広報委員会
2012 年度「日本在住学生会員の ABAI/SQAB 参加に対する助成事業」応募要項	広報委員会
編集後記	ニューズレター編集部

災害と学会

理事長 藤 健一

東北地方太平洋沖地震が発生してから 2 か月が経ちましたが、これによる東日本大震災は個人や地域社会、地方と国、日本と世界というあらゆる諸相において、今までに経験したことのない形の影響を我々に与

えつつあります。こういった非常な困難な事態に直面した個人や組織がいかに関わり合いに対応し、その結果がどういったものであったかについては、種々の視点や観点からの今後の分析が不可欠となります。では、行

動分析学会としてこのような百年に一度あるかというような大災害に対して、どのようにその対応を考えればよいのでしょうか。

考える観点として、「誰（あるいは何）に対する支援」という次元と、「いつ」という次元とがあるように思います。誰（あるいは何）に対する支援かとは、被災した人々（やもの）であったり、関係する人々であったり、救援する人々であったり、後方支援をする人々などというように考えられるでしょう。今回の震災において、行動分析学会の会員の皆様が、あるいは個人として、あるいはその職務として、あるいは職場の一人として、あるいは組織の一員として、これにいかに関与されたかについては、本ニュースレターにある三人の会員の方々の貴重な記録報告からも知ることができます。

では、「いつ」という次元は何か。それは、そういった「支援」をいつ行なうか、という視点のことです。災害の発生を契機として実行する支援のほか、将来発生するかもしれない災害に備える準備行動（防災行動とでもいうのでしょうか）があります。今回のような大災害を発生させた地震のような自然現象は周期性を有していることから、こういった災害を何十年、何百年という歴史的・地質学的時間単位で考えた場合、

大災害と大災害との間の平穏な期間の方が長いという自然のスケジュールにあると思います。そうしますと、地質学でいう氷河期と氷河期との間のしばしの温暖な時期、間氷期になぞらえて、こういった期間は間震災期としてとらえた方がよいのではないかと思います。

災害の発生を契機とする支援は、いうまでもなく重要事です。ちなみに、今夏の年次大会では、学会企画シンポジウム「東日本大震災の障がい児・者支援の状況と課題（仮題）」の開催について、現在理事会（研究教育推進委員会）で検討しています。

私は、今回これに加えて、間震災期における「防災行動」の維持と強化の問題を、行動分析学会の課題のひとつとして取り上げることを提案したいと思います。個人や地域が対象となるであろうこの課題を、どのように設計して設定し実行するかは、まさに行動分析学の課題となりうるものです。この課題は、おそらく3年、5年あるいは10年といった長期にわたる研究的実践的企画として設定されるのが相応しいように思います。

今回の大震災は、近々創立三十年を迎える日本行動分析学会の知力と体力の真価を問う契機ともなることでしょう。

東日本大震災に遭遇して

鶴巻 正子（福島大学）

J-ABAニュースの貴重な紙面をいただき、東日本大震災にかかわる福島の現状報告をさせていただきますことに心より感謝申し上げます。また、J-ABA、ABAIをはじめ国内外の諸学会や先生方より多くのご心配と力強い励ましをいただきましたことに心より御礼申し上げます。あらためて、生まれ育った福島の復興に少しでも関わっていこうとの気持ちを強くしております。しかし、未曾有の大地震と大津波から2か月が過ぎても、福島県では未だ原発事故の収束に見通しが立たず、関係機関から「実は、あのとき・・・」のような各種報道が繰り返されることに不信感を

抱き、心身の疲れといらだちが高まっているのも事実です。

平成23年3月11日金曜日、14時46分、福岡からの帰路、いつもよりひどい飛行機酔いを感じ羽田空港の壁にもたれようとした瞬間、同行していた同僚から「地震ですよ！」と言われ緊張が走りました。停車中のモノレールが今にも横倒しになるのではないかと思います。本震がおさまったあと階段を駆け上がりましたが、到着ロビーは修学旅行中の中高生、ビジネスマン、外国人、家族連れなど多

くの人々で溢れ、空港職員がせわしく走り回っていて、そこには数分前とは明らかに違う風景がありました。

福島大学では、平成21年度から文部科学省「大学教育充実のための戦略的・大学連携支援事業」として、福島県内すべての大学・短大・高専が参加する12のプログラムを推進してきました。私も14大学等が参加する学生支援部門の責任者の一人として2年間プログラムに携わり、この日はその一環として福岡市内の大学訪問を終え福島に帰る途中でした。羽田空港、上野のビジネスホテル、北関東に住む弟の家と一日ずつ北上し、水や食料などを積んだ弟の車に同乗して福島にたどり着いたのは3月14日の夕方でした。

国立大学法人に勤務する者は国家公務員に準ずる身分として3月16日から通常勤務となりました。JRが不通でガソリンも補充できませんでしたので、福島大学前を1～2時間に1本しか走らず、乗客はマスクをかけ帽子をかぶった同僚ばかりという福島大学専用のような路線バスを通常の3～4倍の通勤時間をかけて利用しました。

福島大学では早い段階で教職員と学生全員の無事が確認されました。春休み期間でしたので学生は授業再開まで自宅待機となり、4月半ばには補講用課題を郵送やメール等で提示しました。自宅付近の避難所に出かけ学生ボランティアに参加することも推奨しました。しかし、津波や地震により自宅が全壊・半壊した学生、原発事故により自宅に戻れなくなった学生、家族の判断で福島県外へ一時避難した学生も少なくありませんでした。

福島大学では3月下旬から4月下旬までの約1か月間、第1体育館と合宿所、学寮の一部を避難所として提供し、原発事故により浜通りの自宅から避難を余儀なくされた方々を140名ほど受け入れました。社会福祉を専門とする教員、神戸や山古志の避難所運営に関わってきた教員が複数名いましたので、彼らと本学の地域連携課が中心となり、学生や教職員がボランティアとして参加しながら避難所を運営しました。特に、福島市周辺の自宅生や帰省できなかった学生達の活躍には目をみはるものがありました。断水が続き余震が頻発する中、私も学生と一緒に、荷物の運搬、食事の炊き出し、食器洗浄、子ども達の学習や遊びの支援、不足物資の調達、避難所の片付け、文部科学大臣など避難所訪問者への挨拶等々あらゆることをほぼ毎日経

験させていただき、避難されている方々の姿を通して何度も勇気づけられました。また、附属図書館の片付けボランティアでは、老眼と薄暗さで読みにくい図書ラベルとにらめっこしながら、床に落ちた図書を1冊1冊本棚に収納しましたが、余震のたびこ収納したばかりの図書が目の前でぱたぱたと倒れるのを見ていますと、これにはなんともいえない無力感を感じました。

研究室は7階にありますのでこちらも無惨な状態で、本棚から落ちた図書やそのうち片付けようと平積みになっていた教員会議や委員会関連資料の気持ちよいほどの散乱ぶりに一人で大笑いをしました。多くの犠牲者がでたことに配慮し入学式に代わって実施された5月9日の「新入生を迎える会」までに、なんとか研究室を復活させることができました。

福島県では、例年7月下旬に実施される次年度の教員採用試験のうち、小学校、中学校、特別支援学校(小学部、中学部)の募集は中止となりました。就職試験の受験機会を突然失った4年生、次年度以降に予想されるその影響におびえる3年生を見ていると、これからの長い道のりに気が遠くなるような感覚を覚えます。また、安全だとは言われ続けていますがこれまでより放射線量が明らかに高いです。多くの幼稚園や保育所、小中高等学校、特別支援学校では砂場も校庭も思うように使えず、屋外での活動が自粛されています。この夏は子ども達の大好きな屋外プールも多くの市町村で使用できないこととなりました。全国的に有名な福島県の酷暑のなか、できるだけ窓も開けず、一つの校舎に3校、4校と複数の学校が入っていて、体育館使用も我慢し思うように運動できません。3月11日以降、すべての生活も価値観も変わってしまったように感じられます。しかし、私も他の多くの福島県民と同じように、今、自分にできることは何だろうと常に問いかけながら生活しています。福島大学人間発達文化学類では「福島震災学校支援プロジェクト」を立ち上げ、私も学類教員の一人として学生と一緒に県内の避難所にいる子ども達の学習や遊びの支援を継続して行っています。また、毎日の授業の充実とともに、日々の研究の積み重ねに対する地道な努力、委員会等の大学運営や地域貢献など気持ちも新たに進めているところです。福島県とともに、今回の東日本大震災で被災した岩手県、宮城県をはじめ東日本の広い地域の復興を、みなさまには長期間にわたり応援くださいますよう重ねてお願い申し上げます。

東日本大震災に関連して

宮崎 眞（岩手大学）

J-ABA ニーズレターの記事ということで、震災と本学会を関連づけることもあるかと思いますが、私にはそのような記事を書くこともできませんので、岩手大学に関連した出来事を思いつくまま書かせて頂きました。岩手大学のある盛岡市は岩手県の内陸部に位置します。TVなどで連日伝えられている沿岸地域との間には北上山地があり、盛岡市と宮古市はおおよそ 100km 離れています。冬期にはいずれの峠も朝晩凍結し、非常に危険な状態になり、私などは冬になると峠越えはしません。従いまして、同じ岩手県内ですが、申し訳ありませんが、沿岸地域の状況をお伝えすることはできません。

3月11日（金）午後2時46分頃、大学研究室で大きな横揺れを受けました。そのうち収まると高をくくっていました。しかし、横揺れが収まらず普段の地震との違いに戸惑っていると、もう一度大きな揺れが始まりました。そこで、廊下に出、他の教員につられる形で、5階から正面玄関の外に一目散に避難しました。すでに、他学科の先生方や学生が避難していました。

次に、校長をしています附属特別支援学校の様子を直接確認するために、車で30分ほど離れた附属特別支援学校に出向きました。盛岡市内の信号機は消えており、車の通りが少ない道路を選びながら、おそるおそる運転していきました。学校に到着すると、小学部、中学部、高等部の児童生徒はすでに下校し、高等部の1、2名の生徒が保護者の迎えを待っている状況でした。電気、水道などのライフラインがこの時点で途絶えていましたので、児童生徒は連絡があるまで自宅待機という措置をとりました。翌週に実施が計画されていた卒業式を、急遽、規模を縮小し内々に行うことにしました。幸い、本校の児童生徒、保護者、職員に直接的な被害はなく、また、大学においても私の研究室の学生や担任をしている2年生の学生も全員無事で

した。しかし、実家の建物に被害を受けたり、お身内が被災された方などはおり、被害は広範囲に及んでいます。

夜、官舎（今も呼ぶのかどうか？）に戻ると、5階建ての官舎3棟に人の気配が感じられません。水道も電気もなく唯一あるのは携帯電話、懐中電灯1本、FMラジオ付きのウォークマンだけでした。寒いのですがストーブもつきません。厚着をして布団にくるまり、寝ました。深夜、何度も大きな横揺れがありました。古い建物なのでつぶれるか心配でしたが、揺れるだけで持ちこたえました。

沿岸の被災地との関係ですが、震災後の14日に、私の担当するある女子学生とその保護者が宮古に支援物資を持参する話がメールにて直前に入り、急遽研究室にある携帯型のガスコンロとボンベを持って行ってもらいました。その他、教育学部の教員を中心に、高等学校に辞書や教科書、参考書を送ったりする動きも見られるようになりました。3月末からは工学部の教員が中心に全学的に“with”というサイトを立ち上げ、現在は学外の様々な支援団体と連携しながら多様な支援を行っています。

また、岩手大学復興対策本部が4月に入り実質的な活動を始め、連日、借上げバスにて学生が沿岸地域に向き、ボランティア活動を行っています。また、長期的な沿岸域の復旧・復興を支援するため、土木・農林水産業、教育などのインフラを含めた研究プロジェクトの公募などを行っており、長期的な支援に大学として取り組むようです。私の研究室の学生も、幼児の育児支援のボランティアをしたり、街頭募金などを行っているようです。私自身は、Withと対策本部の中の特別支援学校支援班に所属しております。できる範囲のお手伝いを今後とも行っていきたいと考えています。

<連載：いま、こんな社会貢献しています（1）>

JDD日本発達障害者ネットワークによる 東日本大震災現地支援ニーズ調査

井上 雅彦（鳥取大学）

この度の震災における発達障害児とご家族の支援ニーズの調査のため、5月の初旬、岩手県・宮城県に1週間入りしました。7名の派遣員の中で本学会員は私を含めて3名（北海道教育大学の久保賢一氏と兵庫教育大学の岡村章次氏）が参加しました。被災されたご本人やご家族、そして支援者の細かな支援ニーズや支援体制の現状を調査・分析し、両県と厚生省・文科省の各部署に結果を報告するというのが今回の目的でした。

初日は岩手県庁にて福祉関係・教育関係の方から実態をお聞きし、翌日から地震と津波で大きな被害を受けた沿岸部に入り活動しました。保護者の方は、津波の恐怖、避難所の大変さ、直後からの本人の我慢、普段しない行動の出現、親御さんのストレスなど、言葉では表現できないほどの大変な体験を涙ながらに話されました。また、発達障害・自閉症などの支援機関のニーズについても岩手県沿岸部を、宮古から釜石、大船渡までまわりました。

この中で沿岸部地域では、地域の特別支援学校の存在がとても大きかったことがわかりました。特別支援学校はセンター的役割を担っており、コーディネータ

ーと福祉の相談支援専門員の方々が当事者、各機関、学校を繋ぐ動きをされていました。しかし一方で、地域社会や通常学校での発達障害についての理解は乏しく、専門医療機関も地域にないという実態でした。通常学級で手帳や診断のない子どもさんについては、個別の支援計画もないケースが多く、支援情報は前担任とコーディネーターの頭の中という状況が多くあるようでした。

被災した小中学校が被災を免れた学校と統合再開され、人数や環境の変化、ナチュラルサポートや綿密な引き継ぎ体制のくずれている中で、今後教科指導が本格化すると、これら「気になるレベル」の子どもたちが、いろいろな行動面・情緒面において、かんしゃく、対人トラブル、登校しぶりなどが生じていくことが予想されることを県にご報告し、要請がなくても特別支援学校から巡回相談を再開し、外部から入る心のケアチームと連携していくよう各方面に要望させていただきました。

また特別支援学校への通学については、自家用車が被災し公共の交通機関の状況も悪い中で送迎サービスの支援が望まれました。もともと通学バスや福祉に



岩手県庁にて



大船渡市沿岸部

よる外出支援というサービスの乏しい地域であったため、ニーズといっても直接当事者からあがってはこないということがわかりました。

今後は、震災関係の既存のガイドラインや通知が今回の震災でどれだけ機能したかを検証する必要性を感じるとともに、外からきた我々ができることは地域の学校の先生方や専門相談員さんたちが少しでも動

きやすい後方支援ができることだと思いました。

今後の復興にむけては、今回の訪問調査でお会いした支援者や当事者のリーダーを結びつけ支援していくことで、発達障害全般に対する地域システムのネットワークを作り上げるお手伝いをさせていただくことであると思います。

<連載：いま、こんな研究会しています（4）>

行動リハビリテーション研究会

鈴木 誠（新潟医療福祉大学）

2011年2月4日に、行動リハビリテーション研究会（Society for the Study of Behavioral Rehabilitation）が創設されました
<<http://www.koudo-reha.com/>>。

〔目的〕

本研究会は、行動分析学とリハビリテーションに関する研究を促進することによって、リハビリテーションの進歩に寄与することを目的としています。

〔行動分析学とリハビリテーションの関連〕

疾病によって運動麻痺などの機能障害を有した対象者の日常生活動作が自立に至る過程には、機能障害そのものの回復が影響します。そのため、リハビリテーションの分野ではこれまで、機能障害が改善すれば日常生活動作の障害も併せて改善するという想定の下、機能障害の回復に焦点を当てた様々な療法が検討されてきました。例えば、脳卒中による運動麻痺に対しては、筋力トレーニングなどの運動療法、constraint-induced movement therapy、イメージ訓練、ミラー療法、経頭蓋磁気刺激、経頭蓋直流電気刺激、ロボット介在訓練などの効果が報告されています。一方で、運動麻痺などの機能障害を有した対象者の場合、障害を生ずる以前に行っていた行動連鎖では日常生活動作を遂行することが困難になります。このため、障害後の日常生活動作の遂行には、障害を生じる以前にはなかった行動連鎖を新たに獲得しなければならないという課題が生じます。つまり、対象者の日

常生活動作が自立に至る過程には、機能障害の改善と行動の学習が相互的に影響を及ぼしていると考えられます。しかし、機能障害に対する様々な療法が開発されている一方で、有効な日常生活動作練習の方法論は十分には確立しておらず、見通しの立たないまま経験主義的に反復練習が行われているのが現状です。

行動分析学の分野で明らかになってきた行動の法則や学習を促進するための技術をリハビリテーションにおける日常生活動作練習の場面に導入した場合、適切な行動連鎖を学習するためにどのような動作練習が効果的なのかという視点に基づいた様々な検討を行うことが可能になると思われます。

〔これまでの活動〕

2011年4月10日に慶應義塾大学にて本研究会のキックオフシンポジウムが開催されました。シンポジウムには、作業療法士、理学療法士、言語聴覚士、看護師などリハビリテーションに携わる様々な職種の方々が約70名ご参加くださいました。また、インターネットで配信致しましたシンポジウムの生放送を約25名の方々をご視聴くださいました。シンポジウムでは、牛場潤一先生（慶應義塾大学）による記念講演「脳卒中片麻痺上肢に対するブレイン・マシン・インターフェイスを用いた神経リハビリテーション」と4題の事例研究報告が行われました。記念講演では、ブレイン・マシン・インターフェイスという進歩的な内容を臨床現場との接点を中心に分かりやすくご解説

頂きました。また、事例報告では、臨床現場における試行錯誤や工夫が詳細に説明され、ご参加頂きました方々との活発な意見交換がなされました。

[これまでの成果]

山本淳一先生（慶應義塾大学）、山崎裕司先生（高知リハビリテーション学院）、加藤宗規先生（了徳寺大学）、大森圭貢先生（聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院）、遠藤晃祥先生（日本福祉リハビリテーション学院）を中心に、運動機能や認知機能と日常生活動作の関連についての検討（Suzuki M, et al. *Am J Phys Med Rehabil* 2009;88:924-933 など 32 編）や、日常生活動作練習の効果についての検討（Suzuki M, et al. *Am J Phys Med Rehabil* 2008;87:740-749 など 23 編）を行ってきました。また、それら一連の検討の総括として、行動分析学をリハビリテーションの現場に適用するための枠組みをまとめた書籍「リハビリテーション効果を最大限に引き出すコツ：応用行動分析学で運動療法と ADL 訓練は変わる」（山崎裕司・山本淳一[編]）が三輪書店から 2008 年に刊行されました。

しかし、日常生活動作の種類や、個々の対象者の機能障害・学習能力の多様性を考慮した場合、さらに多様な日常生活動作練習の方法が存在すると思われます。そのため、今後は個々の事例研究を積み重ねるこ

とによって多様な病態に対応した日常生活動作の学習過程を創出すると共に、比較対照試験や前向きコホート研究などによって練習効果や予後予測に関する検討を行っていく必要があると思われます。

[今後のプラン]

行動分析学とリハビリテーションに関する研究を促進するという目的のため、当研究会では、(1) 研究会誌の発行、(2) 書籍の発行、(3) 研修会の開催、(4) 研究会の開催を行っていきたくと考えております。研究会誌については、「行動リハビリテーション研究」を秋に創刊する予定となっており、現在 5 本の論文を査読中です。書籍については、日常生活動作練習に焦点を当てた書籍が三輪書店より出版される予定です。また、2011 年 10 月 2 日と 2012 年 2 月 11 日に認知症や高次脳機能障害を有した対象者に対する介入についての研修会、2012 年 4 月に日常生活動作障害に対する介入についての研修会を開催する予定となっています。

特に、高齢化社会の進展に伴い認知症を有する対象者の数が急速に増加してきていますが、有効な日常生活動作練習の方法が明らかになっていないのが現状です。そのため、認知症を有する対象者の日常生活動作障害に対する介入を目下の重点課題にしたいと考えております。

<連載：いま、こんな授業しています（1）>

自閉症スペクトラム障害臨床実習・専門実習

野呂 文行（筑波大学）

園山繁樹先生と一緒にいる「自閉症スペクトラム障害臨床実習（専門実習）」について紹介をさせていただきます。まずは私の所属している筑波大学障害科学類（1 学年 35 名）ならびに大学院障害科学専攻（1 学年 20 名）について紹介をさせていただきます。ともに特別支援教育・障害者福祉を中心に専攻する教育組織です。特別支援教育の領域では、視覚・聴覚・運動・言語・病弱・知的発達の各障害領域を幅広

く網羅していることが特徴です。園山先生と私は、知的・発達・行動障害の領域に属しており、今回紹介をさせていただく授業も、その領域における専門科目として位置づけられています。

この授業は、知的障害を伴う自閉症の幼児を対象に、行動分析学に基づく支援方法を実習形式で学ぶことを目的としております。受講学生は、この実習に参加する前提として、「行動分析学の基礎」ならびに「自

閉症をはじめとする発達障害の特性」に関する授業の単位を習得していることが、原則として求められています。主な受講者は、園山先生と私の研究室で卒業研究や修士論文を執筆する学生ですが、それ以外の学生（障害福祉を専攻の学生など）も少数ですが、受講しています。

実習では週1回1時間の臨床指導を、2～4グループに別れて行います。1グループは3～5名程度の受講生で構成されており、各グループには、博士後期課程の大学院生1名が、グループリーダー（ティーチング・アシスタント）として配置されます。また、受講生は、1年間で2名の対象幼児の指導を担当できるように（2名の異なるグループリーダーに指導を受けられるように）、前後期でグループ編成を変更しています。

授業の1週間の流れを、図1に示しました。実習の時間を中心に、グループ毎にミーティングを繰り返して行います。その内容は、実習の様子を映したビデオ映像に基づくフィードバックを行ったり、次回の指導内容を検討したりしています。



カンファレンスの様子

ちなみにこの授業は、園山先生も私も、受講生やグループリーダーとして参加し、育ててもらった授業です。その点では歴史も長く、多くの実践家を育ててきた授業であるといえます。私たちが受講者やグループリーダーとして参加していた時は、当日の朝になると胃が痛くなるような思いをしていた記憶があります。しかし最近では、実習の授業が「楽しい」という学生が増えてきている印象があります。「楽しい」と言ってもらえる理由は、園山先生や私のキャラクターによりものなのか、授業運営（特にカンファレンスの内容）

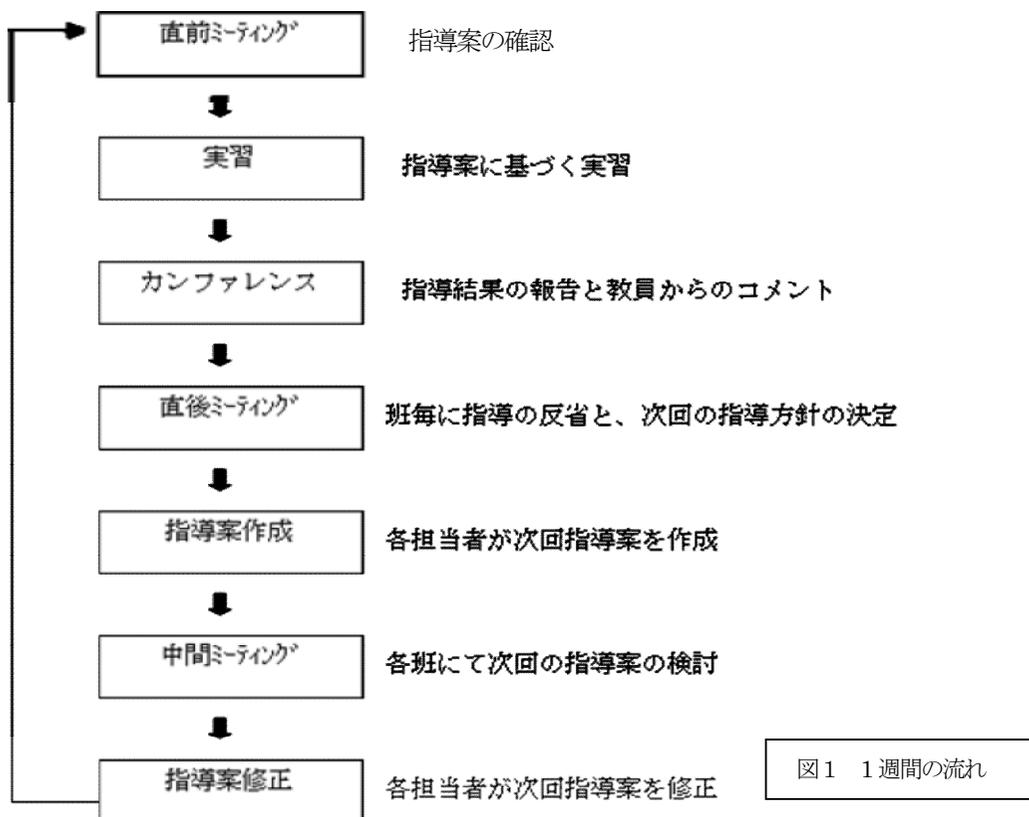


図1 1週間の流れ

の違いによるものなのか、その理由は定かではありません。現在は、「楽しい」と言われて、やや複雑な思いをしながら、授業を行っています。

この授業を通じて、講義や演習で学んだ行動分析学の知識を、使える技術として習得してもらって、これまでと同様、多くの実践家を育てていくことが授業を

担当する私たちの使命であると考えております。

(私自身が受講生やグループリーダーとして、この授業で経験したことを書いた記事が、過去のニューズレターの中にあります。興味ある方は探してみてください)

「卒論・修論データベース」登録のお願い

研究教育推進委員会

現在、学会ホームページでは「卒論・修論データベース (http://j-aba.jp/s_data/)」を見ることができます。会員の方はもちろん、非会員の方も閲覧できますので、行動分析学の普及につながることを期待されます。一度、ご覧いただければと思います。

また、昨年度もご依頼しましたが、今年度も新規データの登録をお願いします。学会員、特に大学教員等により、新しい卒論・修論データを登録(書き込んで)いただくことになります。

誠にお手数をおかけしますが、行動分析学の発展のために、是非ともご協力のほどをお願い申し上げます。

<登録の方法>

1. 学会ホームページから「卒論・修論データベース」

のページに行きます。

2. インデックス [新規データ登録] をクリックします。
3. 必要事項に記入します (なお、著者のところに名前を記入する場合、著者本人の了解を得るようにしてください)。
4. 最後に、登録者用の修正・削除用の PASS (半角英数字 8 文字まで) を入力後、[送信] をクリックします。
5. 管理者が確認・承認した後で公開となります。

(ご協力ありがとうございます)

不明な点は、担当理事(浅野・井澤)までご連絡ください。

<事務局から>

特別会員制度が始まりました

事務局

日本行動分析学会に新たに「特別会員」という会員が誕生しました。正会員歴が 20 年以上の 70 歳以上の方が対象です。特別会員になりますと、年会費無料、年次大会と懇親会にも無料でご参加いただけます。ただし、機関誌「行動分析学研究」はお送りしません(別途購入のお申し出をされれば、従来通り入手可能で

す)。役員の選挙権、被選挙権もなくなります。特別会員を希望される方は、行動分析学会会則ならびに細則の該当箇所をよくお読みの上、申請書類を学会ホームページからダウンロードし、必要事項をご記入の上、事務局にお送りください。

<事務局から>

会費の口座振替制度が始まります

事務局

今年度から学会に入会された方にはすでにお伝えしておりますが、来年度会費から、口座振替制度が始まります。口座振替にいたしますと、①郵便局等へ出向いてのお振り込みの手間が省

けます、②お振り込み忘れをしなくて済みます。近々、事務局より、これに関する郵便がお手元に届きます。みなさま、ぜひ、口座振替制度をご利用くださいますようお願い申し上げます。

<事務局から>

会員名簿を改訂します

事務局

日本行動分析学会は、3 年に一度、会員名簿を更新しております。今年はその年にあたります。7 月頃、みなさまのお手元にそれぞれのお名前等が書かれた原稿が届きます。変更等がご

ざいましたら、ぜひ、ご訂正の上、返送ください。変更がない場合でも必ずご返送ください。会員相互のさらなる交流の助けになる名簿にしたいと思っております。

2011年度「日本在住学生会員のABAI/SQAB参加に対する助成事業」による助成者の決定

広報委員会

2011年度「日本在住学生会員のABAI/SQAB参加に対する助成事業」の応募は、去る3月31日で締め切りました。助成枠2名のところ、応募者は5名あり、5月10日に公開抽選を事務局にて行いました。その結果に基づき、常任理事会において下記の2名の方を助成者に決定しました。5月末に米国コロラド州デンバーで開催される第37回国際行動分析学会（ABAI）での発表を条件に、一人7万5千円が助成されます。次号には体験記を掲載する予定です。

なお、次回（2012年度分）の応募要項は詳細は以下に掲載するとともに、近日中に学会ホームページに掲載します。奮ってご応募ください。

<助成者>

- 長谷川福子氏
(常磐大学大学院人間科学研究科)
- 木下奈緒子氏
(同志社大学大学院心理学研究科)

2012年度「日本在住学生会員のABAI/SQAB参加に対する助成事業」応募要項

広報委員会

日本行動分析学会は、1983年の創立以来、行動分析学の発展に寄与してきましたが、創立20周年を機に、次世代を担う学生会員の国際的な情報交流活動を推進するために、ABAIへの参加を助成する事業を開始しました。さらに2007年度からは、事業を進展させ、SQABへの参加も助成対象に含めることに致しました。学生会員の奮っての応募を期待します。

<応募資格>

1. 2012年5月に米国シアトルで開催されるABAIまたはSQABに発表を申込み、受理された者。
2. 発表の種別は、口頭発表、ポスター発表、シンポジウムのスピーカー、パネルディスカッションのスピーカー、のいずれかであること。また、口頭発

表、ポスター発表では、第一発表者であること。ビジネス・ミーティング、ABAI Expo、同窓会(reunion)、ワークショップのみの参加者は応募できない。

3. 2011年10月1日に、日本行動分析学会の学生会員として登録されている者で、ABAI/SQAB参加に対して他の資金援助を受けていない者。ただし、SABAが募集する学生発表者の大会参加費免除への同時応募は認められる。
4. 申請時に日本国内に居住していること。
5. 過去にこの事業による助成を受けた者も応募できるが、選考にあたっては、過去にこの事業による助成を受けていない者を優先する。

<提出書類>

1. 規定の応募用紙に必要事項を書き込んだもの。
応募用紙は、ニュースレター、学会ホームページあるいは学会事務局からも入手できる。
2. ABAI/SQAB に提出した発表申込書を印刷したもの。
3. ABAI/SQAB が発行する発表受理書を印刷したもの。

<助成額>

応募者の中から2名に対し、1名につき75,000円を支給する。ただし、受給後、ABAI/SQAB に参加を取りやめた者は返金しなければならない。

<応募締切>

2012年3月31日消印有効。

<選考方法>

過去にこの事業による助成を受けていない者を優先し、原則として、4月20日までに、事務局において公開抽選を行い、常任理事会において助成者を決定し、該当者に通知する。その他、選考に必要な事項は常任理事会で決定する。

<提出先>

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

日本行動分析学会事務局

URL : <http://www.j-aba.jp/>

E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

日本行動分析学会 第29回年次大会

大会準備委員会会長 木村 裕

<大会>

- 会 期 : 2011年9月18日-19日(日・月)
- 会 場 : 早稲田大学戸山キャンパス

<懇親会>

- 日 時 : 2011年9月18日(日) 夕刻
- 会 場 : 大隅ガーデンハウス

<今後の予定>

※発表申し込み締め切りを延長

- 5月16日(月) シンポジウム申し込み締め切り
- 5月23日(月) 発表申し込み締め切り
- 6月上旬 第2号通信送付
- 6月13日(月) シンポジウム採択通知
- 7月11日(月) 発表抄録など締め切り
一般予約参加締め切り
諸費用払い込み締め切り

<大会ホームページ>

<http://www.waseda.jp/assoc-j-aba2011/>

年 月 日

2012 年度「日本在住学生会員の ABAI/SQAB 参加に対する助成事業」
申 請 用 紙

氏 名： (英字表記)	
所 属： (英字表記)	
E-mail：	
発表の種別：	<input type="checkbox"/> 口頭発表 <input type="checkbox"/> ポスター発表 <input type="checkbox"/> シンポジウム <input type="checkbox"/> パネルディスカッション
発表タイトル：	
指導教員の 署名：	<p>私_____は、申請者_____が、 _____大学に所属する私の指導学生で あることを証明します。</p> <p style="text-align: right;">年 月 日</p> <p>氏 名： _____ 印</p> <p>所 属 _____</p>
過去の本助成の有無	有 (_____ 年度) 無

学会記入欄	
受理月日	受理番号
月 日	

編集後記

この度の東日本大震災で被災された皆様に、心よりお見舞い申し上げます。今号には福島県の鶴巻先生、岩手県の宮崎先生に被災地の状況をご寄稿いただきました。また井上先生には発達障害の専門家による被災地支援活動の一端を、「連載：いま、こんな社会貢献しています」の第1号としてご寄稿いただきました。

今も避難先で困難の多い生活のただ中にある皆様、復興に向けて全力を傾けておられる方々のことを思い、一日も早い復興を祈念するばかりです。本学会においても、復興に向けての協力を長期に渡って計画・遂行していく必要性を痛感いたします。

(園山)

J-ABA ニュース編集部よりお願い

- ニュースレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内などです。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニュースレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。
- ニュースレターに掲載された記事の著

作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで公開します。

- 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒305-8577 茨城県つくば市天王台 1-1-1
筑波大学障害科学系園山研究室気付
日本行動分析学会ニュースレター編集部
園山 繁樹
E-mail: sonoyama@human.tsukuba.ac.jp

「行動分析学研究アンソロジー2010」刊行

日本行動分析学会創立 30 周年記念



〔編〕 日本行動分析学会

〔責任編集〕 藤健一， 望月昭， 武藤崇， 青山謙二郎

〔出版社〕 星和書店

定価 3,675 円（本体 3,500 円） B5 判 並製 320 頁

